

## アナログレコード用ラッカー盤カッティング その4

キング関口台スタジオ

見たい聞きたい行きたいレポート 照井 和彦 JAS 事務局長

これまでにソニー・ミュージックスタジオ、ミキサーズラボ、日本コロムビア、JVC ケンウッド・クリエイティブメディア、東洋化成の状況について3回にわたり取り上げてきました。今回は、この秋から稼働を開始しましたキング関口台スタジオの様子をお伝え致します。

### キング関口台スタジオ

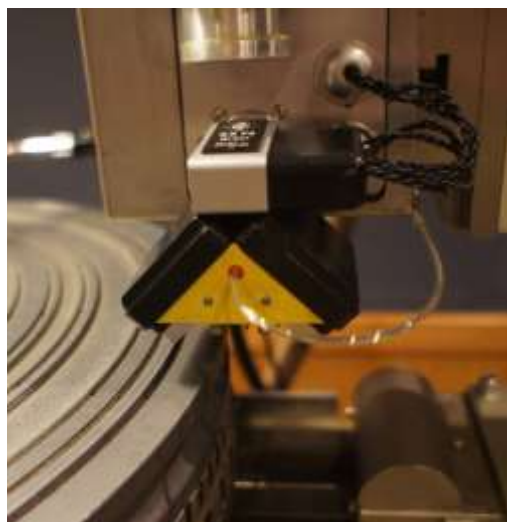


本誌（JAS ジャーナル）2018年1月号、輝かしきキングレコード録音史で菊田俊雄さんのコメントでも紹介されておりますが、キングレコードのルーツは1931年1月に現在の講談社にキングレコード部が新設されたところから始まります。独テレフンケンと技術提携を結び、音羽に録音スタジオを建設し本格的な音楽制作が進められました。アナログLPレコード最盛期には5台のレースを旧埼玉工場に置き、1961年にはオーディオマニアに絶賛されたスーパー・ダイナミック・サウンドシリーズや、海外からカーペンターズのマスターテープが届くなど、数々の名曲がカッティングされていきました。1984年の埼玉工場閉鎖にともない、幸運な二台のカッティングレースが音羽スタジオへ引っ越します。音楽メディアがCD（コンパクトディスク）へ移行する中、一台は1991年に稼働停止し、残る一台も2004年まで関口台スタジオで働き続けました。

そしてアナログレコードの音質的な評価の高まりにより、再びこれらのカッティングレースが日の目をみることになったのです。

カッティングレース VMS 70

ノイマン製 VMS 70 はキングレコードが所有する荒川区の倉庫に嚴重に梱包され静かに保管されていたものを、機材一式を関口台へ移動した上で、同社 OB エンジニアの手を借り、手間を掛けて組立と調整が進められました。そしていよいよ今年7月末から本格稼働を再開する運びとなったのです。



(写真上) VMS 70 本体 (写真左下) SX 74  
(写真右下) ターンテーブル





丁寧に梱包されていたという VMS 70 の本体はそれでも 22 年間倉庫に放置されていたから、ホコリまみれの状態だったようです。慎重に包みをほどくと特にカッティングレースとして重要な機構の一つ、カッターヘッドパート送り用ボールねじ（リニアアクチュエーター）は、潤沢に油が染みており大変良い状態で現れました。引き続き倉庫内を捜索して、エレクトロニクスサーキット（SAL 74）、カッターヘッド（SX 74）、カッティング針、専用の接続ケーブル類一式、コンソール部、運用マニュアルなどが次々と発見され、システムとして不足部分が無いことが確認できたのです。



（写真左下）カッターヘッド部の裏面をみたところ。専用ケーブル類や冷却用ガスの供給パイプ類が見える

（写真中央下）SAL 74 カッティングヘッドへ供給する電力用のパワーアンプや保護回路類が設置されている。

カッティングレース VMS 66



いよいよキングレコードでもアナログディスクのリリースを終了することとなった 2004 年まで稼働していたノイマン製 VMS 66 は、自社開発のオリジナル真空管式パワーアンプでカッターヘッドをドライブするタイプの、歴史的にも貴重な機材ということもあり、東京八王子にある専門学校へ寄贈されていました。今回の復活のため、学校のご厚意で返却され、現在メンテナンス

が進行しているところです。

駆動モーターにはダイレクトドライブ方式の DENON 製が装換されており、スーパー・ダイナミック・サウンドシリーズの製作に長年愛用されていた理由が伺えます。





(写真左上) VMS 66 のアンプラック群

(写真右上) 使われている真空管は 6G-B8 ビーム出力管パラプッシュ駆動

(写真下) TELEFUNKEN M15A 1/4 インチテレコ。DECCA マスターテープの再生に活躍した



カッティングエンジニア 上田 佳子

キング関口台スタジオがアナログカッティングを開始するにあたり、操作してくれるエンジニアが必要になりました。そこで手を挙げて二年前の 2018 年にやって来てくれたのが上田さんです。このスタジオに来るまでにはキティレコード系スタジオでのアシスタントや CD マスタリングを経験し、東急ファンスタジオへ移籍し 2000 年には一度フリーランスとなって活躍していました。

この業界に飛び込むキッカケとなったのが JAS ジャーナルでも紹介した JVC マスタリングセンターの小鐵 徹さんにお会いし、その作業の様子を見学したことと言います。

思い出のマスタリング作品は globe 1<sup>ST</sup> ALBUM で、作品 12 曲中ハーフインチのアナログマスターからの作業もあって、とても印象に残っています、とのこと。



(写真左から) カッティングエンジニアの上田さんと経営本部の高橋さん

近い過去からのお宝箱を発見

記録保存用資料 (永久保存)		(1995.3.10)
内容		
アナログ カッターヘッド		
1. ES59	#155	モノ用
2. ZS90/45	#078	VL型
3. SX45	#090	
4. SX80	#221	
5. SX74	#827	
6. WESTREX		
3D型	#157	取付金具無

カッティングルームの保管棚にあったこれまでに稼働していたカッターヘッドがズラリ機会があったらヘッド特集を組んでみたくなりました。

おしまいに

2017年に社内の稟議書がOKとなり、今年2019年にお披露目できるまでには大勢の方々の協力を得ました。キングレコードOBで真空管アンプの製作者でもある青木さん、ノイマンのマシンに詳しいエンジニアの原さん、日本コロムビアからは冬木さんと武沢さん、山本さん、斎藤さん、鈴木さん、田林さんからのサポートがあったとのことでした。

キング関口台スタジオには5つのブースを持つメインエリアが174㎡天井高10mのスタジオ設備があります。このスタジオで演奏ミックスした音源でのカットティング作業、つまり、70年代に盛んに行われていたダイレクトカットレコードの制作ができます。次の記事ではこのスタジオで実際に行われた、最新2019年ダイレクトカットティング制作レポートをご報告致します。